

Information and Resources Study Group
of
the Japanese Council of Art Museums

「全国美術館会議 情報・資料研究部会企画セミナー」
美術情報・資料の活用方法

— 展覧会カタログから
Webまで —

全国美術館会議の情報・資料研究部会が担当してセミナーを開催することとなりました。

さまざまな美術館活動のなかで、情報・資料への取り組みほど各館の独自の方法にゆだねられている分野はないのではないのでしょうか。それは共通の分類や整理方式を持たないということだけではなく、人や資金面での問題も多く、その達成度においてもかなりの差があることが指摘できると思います。

情報・資料研究部会では、本年度の活動として、情報・資料の活用について、とくに新しい文献検索の事例について情報収集を進めてきましたが、文献へのアプローチを検討すると同時に、情報を発信する側としての美術館側にも考慮しなければならない問題があることにいたりしました。

どのような美術館でも、カタログや逐次刊行物等を発行し何らかの情報を発信しています。そのような発行物の書誌情報をどのように扱うかという基本的なことが考慮されていないため、それらの発行物の情報が正しく共有されることが困難な場合がみられるのです。書誌情報についての初歩的、基本的な考え方を伝える必要があるのではないかというのが、このセミナー開催の発端です。

今回のセミナーでは、基本的な書誌情報の取り扱いから、美術館資料・情報の活用まで組み込んでいます。必要な情報へアクセスする方法を伝えるとともに各々の美術館がどのように資料を整理し情報を発信すればいいのか考えていきたいと思っています。

各美術館の貴重な情報を共用するために、情報・資料研究部会がお役に立てば幸いです。

全国美術館会議 情報・資料研究部会長
山脇 佐江子
(姫路市立美術館長)

ごあいさつ		1
	山脇 佐江子 (姫路市立美術館長 / 情報・資料研究部会長)	
プログラム		3
総論	「美術情報・資料の活用法—提供と利用のはざまにおいて」	5
	水谷 長志 (東京国立近代美術館)	
第I講	「展覧会カタログ」	6
	住広 昭子 (東京国立博物館)	
第II講	「美術館の逐次刊行物」	10
	中村 節子 (石橋財団ブリヂストン美術館)	
第III講	「今日の図書館から俯瞰する美術館の資料活動」	14
	水谷 長志	
第IV講	「電子的リソース (二次資料)」	18
	水谷 長志	
第V講	「電子的リソース (一次資料)」	22
	川口 雅子 (国立西洋美術館)	
第VI講	「作品情報のアクセスと発信」	26
	室屋 泰三 (国立新美術館)	

全国美術館会議 情報・資料研究部会 企画 セミナー プログラム

テーマ： 美術情報・資料の活用法 — 展覧会カタログから Web まで
 会期・会場： 2009年11月10日(火) 東京国立博物館—11日(水) 国立西洋美術館
 主催： 全国美術館会議 情報・資料研究部会
 趣旨：

美術館における情報・資料の活用について、総論+6コマ2日間にわたるセミナーを開催いたします。変化のスピード激しい図書館の現況を踏まえた上で、展覧会カタログ、美術館の逐次刊行物(雑誌)から始めて、近年 Web 上などで構築・活用が急速に進んでいる美術情報のデータベースなど電子的リソースについて、二次資料からフルテキストの入手までを紹介し、その効果的な整理・利用法を検討いたします。また、当研究部会が以前より取り組んでまいりましたテーマの一つである情報技術を活かした作品情報のアクセスと発信の可能性についても、美術館の現場で広く関心を引き起こしていきたいと考えています。

第1日 2009年11月10日(火)

09:15	受付
09:30-09:35 (5分)	開会の挨拶： 山脇 佐江子 (姫路市立美術館長 / 情報・資料研究部会長)
09:35-09:50 (15分)	総論「美術情報・資料の活用法—提供と利用のはざまにおいて」 水谷 長志 (東京国立近代美術館)
09:50-11:10 (80分)	第I講「展覧会カタログ」 住広 昭子 (東京国立博物館)
11:10-11:20 (10分)	休憩
11:20-12:40 (80分)	第II講「美術館の逐次刊行物」 中村 節子 (石橋財団ブリヂストン美術館)
12:40-13:40 (60分)	昼食
13:40-15:00 (80分)	第III講「今日の図書館から俯瞰する美術館の資料活動」 水谷 長志
15:00-16:00 (60分)	施設等見学
16:00-17:00 (60分)	質疑討論
17:30～	懇親会

第2日 2009年11月11日(水)

09:15	受付
09:40-11:00 (80分)	第IV講「電子的リソース(二次資料)」 水谷 長志
11:00-11:20 (20分)	休憩
11:20-12:40 (80分)	第V講「電子的リソース(一次資料)」 川口 雅子 (国立西洋美術館 / 情報・資料研究部会幹事)
12:40-13:40 (60分)	昼食
13:40-15:00 (80分)	第VI講「作品情報のアクセスと発信」 室屋 泰三 (国立新美術館)
15:00-16:00 (60分)	施設等見学
16:00-16:55 (55分)	質疑討論
16:55-17:00 (5分)	閉会の挨拶: 鴨木 年泰 (財団法人 東京富士美術館 / 情報・資料研究部会幹事)

2009.11.10 (火) 9:35—9:50 於、東京国立博物館 平成館 小講堂

水谷 長志 (東京国立近代美術館)

1. はじめに—本セミナー「美術情報・資料の活用法—展覧会カタログから Web まで」の成立と目的

2. 美術館図書室 (Art Museum Library、以下 AML) の課題と責任

Museum as publisher ということ
「ミュージアムはきわめて旺盛な出版活動の主体である」

Museum publications について
「多様な出版物 活動の記録として永く残すべきもの vs 一時的なエフェメラ (ephemera)」

Museum publications へのアクセス可能性を考える
「灰色文献からの脱却」

eg. 展覧会カタログのアクセス可能性を考えてみる

自館刊行物を共有財にするための課題と責任

ALC: Art Libraries' Consortium 美術図書館横断検索
『展覧会カタログ総覧』日外アソシエーツ 2009.3

3. 提供と利用のはざまにおいて

scientific community の特性

publisher (writer) であり user (reader) であること

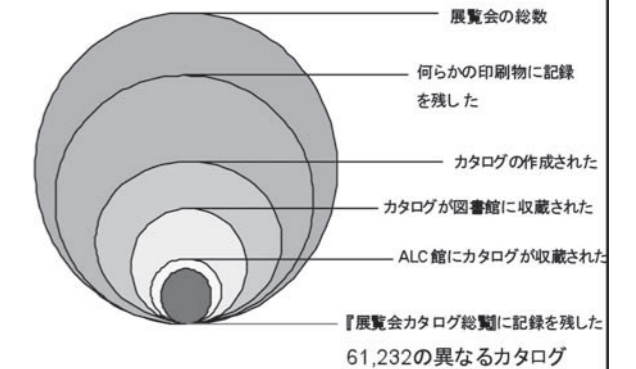
ミュージアムの資料担当の課題と責任

publisher (writer) side として
accessibility
[自館刊行物の] 提供可能性の範囲を自覚する

user (reader) side として
availability
[必要とする資料の] 利用可能性の回路を保証する

相互協力網の必要と設置義務/可能性の根拠

展覧会とそのカタログ 数の見通し



4. AML を担う人—どこもさほどの大差なく、同じような事で頭を悩ませているということ

AML のための場として [も], 全国美術館会議 情報・資料研究部会があるということ

5. 各論の構成

情報・資料業務を語る二側面

—資料論と組織化論

本セミナーの主力は前者の資料論
組織化論は参加者の業務実態を踏まえ、質疑の中から展開をあるいは、またの機会に

第I講「展覧会カタログ」 資料論

第II講「美術の逐次刊行物」 資料論

第III講「今日の図書館から俯瞰する美術館の資料活動」 折衷論

第IV講「電子的リソース(二次資料)」折衷論

第V講「電子的リソース(一次資料)」資料論

第VI講「作品情報のアクセスと発信」システム化論

1. 展覧会カタログとは

1.1 展覧会カタログの定義

展覧会の目録
展覧会であることが判明・出品が同定できる資料・(会期中に販売・配布)

1.2 展覧会の種類

目的 販売・宣伝／発表・コンクール／公開・陳列

形式 個展／グループ展／美術団体展／コンクール展／常設展／企画展／巡回展／共催展

1.3 展覧会カタログの発展

戦後 小冊子から大型化／図版の割合の増加とカラー化／体裁の多様化

論文・参考文献・各種資料等の充実／バイリンガル化 (学術的カタログ)

出版部数の増加／制作・編集方法の変化／刊行形態の変化 (展覧会終了後の刊行)

現在の展覧会カタログ 学術的なカタログの一般的構成
主催者あいさつ／概説／論文／作品図版／作品データ (名称、作者、時代・制作年、品質形状・素材、寸法、所蔵者、来歴、文献等)／作品解説／年表・年譜／参考文献／作家解説／用語解説／資料等

2. 展覧会カタログの取り扱い—資料的特性と管理

2.1 収集

2.1.1 美術の世界での灰色文献

・展覧会の会期中に販売され、発行部数も少なく、図書としての一般の流通経路にのらない。入手が困難。(洋カタログとの違い)

・著作権法第 47 条 (美術の著作物等の展示に伴う複製) 上の小冊子?
レオナルド・フジタ展カタログ事件

2.1.2 収集方法

・入手のための情報収集はインターネットの普及により以前より容易に
・購入方法
ミュージアムショップ／共催新聞社／古書店／図録ネット等
・寄贈・交換
網羅性・即時性・継続性・受入体制が課題
・JAC(Japan Art Catalog) プロジェクトのために開設したアートカタログ・ライブラリー (1996 年 11 月—2004 年 10 月) の資料は、国立新美術館に引き継がれ、事業継続
・美術館図書室のみならず、大学図書館等でも展覧会カタログを収集
東京大学駒場美術博物館資料室 平成 19 年 (2007) 開室

2.2 整理

2.2.1 資料区分と配列 (物理管理)

資料区分 (配置)
一般図書との区別
パンフレット状のカタログの扱い

配列

・カタログという資料区分を設ける場合は独自の配列が可能

分類順配列 同じ分類が集中／複合主題のものも一か所にしか置けない
会場順配列 館コードの付与とその維持が必要
受入順配列 スペースの節約／検索手段が別に必要

2.2.2 目録・データ作成 (情報管理)

目録の例

・国立国会図書館
・NACSIS-CAT
・東京都現代美術館

目録作成のツール

・「日本目録規則」1987 年版、改訂 3 版 日本図書館協会目録委員会編 日本図書館協会、2006 ①

・目録システムコーディングマニュアル ②
<http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/MAN2/CM/mokuji.html>
※展覧会カタログの取り扱いについて詳しいルールを定め 2006 年 6 月より運用を開始

・「展覧会カタログに関する取扱い及び解説」③
http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/manuals/exhb_toriatsukai.pdf
・「コーディングマニュアル (展覧会カタログに関する抜粋集)」④
http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/manuals/exhb_cm.pdf

洋書については

・『英米目録規則 (Anglo-American cataloguing rules, 略称 AACR2) 第 2 版 日本語版』日本図書館協会、1995
・ *Art exhibition documentation in libraries: cataloguing guidelines* compiled by the ARLIS/UK & Ireland Cataloguing and Classification Committee ARLIS/UK & Ireland, 2000. (展覧会カタログのためのガイドライン)

展覧会カタログの目録作成におけるポイント

記述

<タイトル>

・標題紙がない→図書中にもっとも詳しい書誌情報が示されている情報源を標題紙に代わるものとみなす。①
・情報源 (標題紙・背・奥付・表紙) によって表記が異なる→原則として標題紙を情報源とする。④
・「特別展」・「〇〇記念展」などの冠称の扱い
→タイトル関連情報 (サブタイトル) とする。④
→TR フィールドに記録することができるのは、本タイトルと同一個所に表示されているタイトル関連情報のみ。それ以外の個所に表示されているタイトル関連情報は、VT フィールドに記録する。②
・年次・回次の扱い
→VOL フィールド ②

<責任表示>

・責任表示が明示されていない場合 →情報源になければ記載しない。(「[編]」として補記する場合も)
・個人の著作か団体の著作かが不明
→人名の場合の肩書き・所属団体は省略。①
・巡回展や新聞社との共催展などの場合、著者が複数にわたる場合が多い。→4 つ以上は省略する。②
・展覧会そのものの役割分担とカタログの責任表示の違い
→カタログの成立に関する役割表示のみを記録する。

<出版事項>

・出版地・出版者が資料本体に表示されていない場合、開催地・会場名を出版地・出版者として補記する。④

<対照事項>

・ページ付のない場合、1 冊とする。大きさは cm 以下を切り上げる。変形本は縦×横 ①

<注記>

・会場・会期、主催者など展覧会カタログに固有の情報 →NOTE フィールドに記録する。④
・展覧会の企画・主催者 (3 つまで)、出品作家 (3 名程度) を記録する。④
・展覧会の会期・会場に関する情報を記録する。巡回展の場合は 3 会場まで。④
・会期・会場は、図書以外の情報から補うこともある。

アクセスポイント (標目)

<著者標目>

・上記 展覧会カタログのコーディングマニュアルにおいて、下記についての AL フィールドを作成することを定めた。
1) 展覧会カタログの編著に関わった個人あるいは団体
2) 展覧会に出品した作品等の制作者である個人あるいは団体 (出品作家)
3) 企画・主催等において展覧会の開催に関与した個人あるいは団体
4) 単館展の場合に会場となった美術館等団体

<件名>

・一般的な件名表 NDLSh(国立国会図書館件名表) と BSH(基本件名標目表 日本図書館協会)
件名目録はカード目録の時代にはあまり作成されず。コンピュータ目録では今後、重要となる。
・上記 展覧会カタログのコーディングマニュアルにおいて「展覧会カタログ」という件名の他、出品作家および単館の所蔵作品のみで構成する展覧会の場合における所蔵館名などを件名とすることを定めた。

<分類>

・一般的な分類法 NDC(日本十進分類法)
書架分類(書架に配列する際の分類)と書誌分類(書誌データ上の分類)の両方に使える。
・独自分類 採用する館もある。維持に労力がかかる。

2.3 保管・保存

・保管場所・方法に配慮必要
・廃棄の問題浮上
・作成館での保存の責任 館の活動の記録

3. 展覧会カタログの利用

3.1 利用の目的

展覧会（催事）情報の情報源
 展覧会出品歴の情報源
 作品情報の情報源（作品データ・画像・参考文献）
 作家に関する情報源（年表・年譜・著作物採録）
 レファレンスサービスの情報源
 最新の研究動向の入手

3.2 展覧会カタログの検索

目録（刊行物）

・『展覧会カタログ総覧』日外アソシエーツ株式会社編
 日外アソシエーツ（紀伊国屋発売），2009.1 2冊
 東京国立近代美術館・横浜美術館・国立西洋美術館・東京都
 写真美術館・国立新美術館・東京国立博物館・東京都江戸東京
 博物館の7館が収集した展覧会のカタログ61,300点を分類別
 に配列し、開催年や会場会期、主催者および所蔵館を掲載。
 巻末に人名・事項名索引と、主催者名索引を付す。

・『東京都現代美術館所蔵展覧会カタログ目録 日本語
 （本文編）・日本語（索引編）』東京都現代美術館普及部図書
 情報係（美術図書室）編 東京都現代美術館，2000.3-2001.2 2冊

・『東京文化財研究所蔵書目録 6(上)展覧会カタログ
 目録編：1888-2004年開催分)-6(下)展覧会カタログ
 索引編』東京文化財研究所情報調整室資料閲覧室編 文化財研究
 所東京文化財研究所，2006.3

・『笹木繁男氏主宰現代美術資料センター寄贈資料目録』
 東京文化財研究所，2002.3 CD-ROM1枚

・『笹木繁男氏主宰現代美術資料センター寄贈資料目録
 画廊関連データ』
 [文化財研究所東京文化財研究所]，2006.3 CD-ROM1枚

・「特集：国立国会図書館所蔵戦前期美術展覧会関係資
 料目録」石渡裕子『参考書誌研究』第50号 国立国会図書館専門
 資料部，1999.2

・*The Worldwide bibliography of art exhibition
 catalogues, 1963-1987. vol.1-3.* Millwood, Kraus
 International, 1992 3v.

・NDL-OPAC 国立国会図書館蔵書検索
<http://opac.ndl.go.jp/>
 ・NACSIS Webcat（国立情報学研究所）
<http://webcat.nii.ac.jp/>
 フリーワードに「展覧会カタログ」と入力して
 検索すると44,520件ヒット（2009.10.22確認）

・美術図書館横断検索 (ALC)
<http://alc.opac.jp/>
 下記の機関の展覧会カタログを含む蔵書を横断検索
 ・東京国立近代美術館アートライブラリ 平成14年(2002)年開室
 ・同工芸館図書閲覧室 平成14年(2002)年開室
 ・同フィルムセンター図書室 平成7年(1995)開室
 ・国立新美術館アートライブラリー 平成19年(2007)開室
 ・東京都現代美術館美術図書室 平成7年(1995)開室
 昭和50年(1975)開室の東京都美術館美術図
 書室の蔵書を引き継ぐ
 ・横浜美術館美術情報センター 平成元年(1989)開館
 ・国立西洋美術館研究資料センター 平成14年(2002)開室
 ・東京都写真美術館図書室 平成7年(1995)開室
 ・東京国立博物館資料館 昭和59年(1984)開館
 ・江戸東京博物館図書室 平成5年(1993)開館

・展覧会カタログ検索（東京文化財研究所）
<http://archives.tobunken.go.jp/internet/cbkensaku.aspx>
 2008年11月4日 26,724件
 会場名・展覧会名・開催年(単年度のみ)から検索

複製

・『近代日本アート・カタログ・コレクション』
 ゆまに書房，2001-
 明治初期～戦前の展覧会カタログの復刻。
 ・近代デジタルライブラリー（国立国会図書館）
<http://kindai.ndl.go.jp/>
 明治・大正期刊行図書の資料本文をデジタル
 画像で閲覧できるサービス

3.3 展覧会の出品情報の検索

目録（刊行物）

・『内国勸業博覧会美術品出品目録』
 東京国立文化財研究所美術部編 東京国立文化財研究所，1996
 ・『明治期万国博覧会美術品出品目録』
 東京国立文化財研究所美術部編 東京国立文化財研究所，1997
 ・『明治期美術展覧会出品目録』
 東京国立文化財研究所美術部編 東京国立文化財研究所，1994

・『明治期府県博覧会出品目録』明治四年～九年
 東京文化財研究所美術部編 東京文化財研究所，2004.3
 ・『大正期美術展覧会出品目録』
 東京文化財研究所編 東京文化財研究所，2002
 ・『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』
 東京文化財研究所美術部編 東京文化財研究所，2006
 ・『日展史』1(第1回文展：明治40年)～41(改組第10回日展：
 昭和53年) 1980-2002 日展，1980-
 ・『日展史資料』日展史編纂委員会編 日展，1990 2冊
 1 文展・帝展・新文展・日展全出品目録 明治40年-昭和32年
 2 文展・帝展・新文展・日展全出品索引 明治40年-昭和32年
 ・『美術家索引（日本・東洋篇）』
 恵光白編 日外アソシエーツ（紀伊国屋書店発売），1991.12

3.4 展覧会情報の検索

3.4.1 開催中の展覧会

・Museum-Café（廣齊堂）
<http://www.museum-cafe.com/exhibition/index.html>
 採録対象 美術館402館 博物館156館 画廊・その他88館
 展覧会は、館区分、地域、日付、ジャンルから検索 2000以
 降対象

・アートコモンズ（国立新美術館）
<http://artcommons.nact.jp/>（2007年3月開設）
 全国541の美術館、34の美術団体、39の画廊の展覧会情報
 展覧会は、会場、展覧会名、地域、会期、ジャンル、キーワー
 ド等から検索 2000以降の情報蓄積

・インターネットミュージアム（丹青社）
<http://www.museum.or.jp/>
 展覧会・イベント情報はキーワード、イベント分類、館種（ジャ
 ンル）、地域、期間から検索

・Artscape（大日本印刷）
<http://artscape.jp/exhibition/index.html>
 美術情報のwebマガジン（毎月1,15日更新）
 展覧会ピックアップ/展覧会スケジュール等

3.4.2 過去の展覧会

・『日本美術年鑑』明治43年(1910)～
 美術展覧会、美術展覧会図録所載文献および定期刊行物所載文
 献目録の総説とその他（美術関係者、書評、時評、海外展）の
 部分において、古美術と近現代美術に分けていたデータを統合
 した。（平成12年度より）
 ・『日本の美術展覧会開催実績 1945-2000 報告書』
 中島理壽監修 アートカタログ・ライブラリー，2003

・『日本の美術展覧会開催実績 2001-2003 報告書
 _平成15年度文化庁委嘱事業』
 国際文化交流推進協会アートカタログ・ライブラリー，2004
 ・近現代美術展覧会開催情報（東京文化財研究所）
<http://archives.tobunken.go.jp/internet/exkensaku.aspx>
 1935年～2007年までに国内で開催された近現代美術関係の
 展覧会開催情報161,871件
 展覧会名、会場、開催年から検索
 ・各美術館・博物館刊行物
 『国立西洋美術館展覧会総覧』
 国立西洋美術館編 国立西洋美術館，2009
 ・各美術団体の団体史
 ・雑誌記事

3.5 その他の情報を探す

展覧会カタログの中の論文

・ALC 参加館 OPAC で検索
 ・美術関係文献検索（東京文化財研究所）
<http://archives.tobunken.go.jp/internet/oakensaku.aspx>
 展覧会カタログも採録の対象
 2008年10月6日1966～2004年分268,627件
 編著者・キーワード・雑誌名（カタログは書名）からの検索

展覧会カタログの中の美術家書誌

『美術家書誌の書誌：雪舟から東芋、ヴァン・エイクか
 らイ・ブルまで』中島理壽編 勉誠出版，2007.12

4. その他

・他の展覧会関連資料
 エフェメラ類・調査関連資料・広報資料などの扱い
 →アーカイブ化の必要

・国会図書館や公立図書館等への寄贈

・展覧会出品作品情報の共有

紹介：展覧会カタログに関する文献リスト 吉川恵子，長屋俊，水谷
 長志編著 2007
<http://www.momat.go.jp/art-library/art-library-guide/exhcatbiblio.html>

第II講 「美術館の逐次刊行物」

2009.11.10 (火) 11:20—12:40 於、東京国立博物館 平成館 小講堂

中村 節子 (石橋財団ブリヂストン美術館)

1. 美術館と「逐次刊行物」

1.1 逐次刊行物とは何か

- 1) 継続的に分冊として刊行され、あらかじめ完結の期限を定めていない
- 2) 各分冊には、刊行順序を示す巻号などの表示がある
- 3) 同一のタイトル(標題)で、通常は同一の形態
- 4) 定期刊行物と不定期刊行物がある

1.2 逐次刊行物の種類

雑誌・紀要 / 新聞 / 年鑑 / 年報・館報 / 研究報告・調査報告 / ニュース・たより

※これまでは、冊子体や二つ折り等の形態の印刷物が一般的だったが、電子的なものが増えてきた

1.3 美術館は「逐次刊行物」とどのように関わっているか

- 1) 出版者としての美術館
- 2) 利用者としての美術館

2. 出版者としての美術館

美術館は / 私たちは「何を」「誰に」伝えたいのか？

連続して刊行される以上は、一定の編集方針があるのか？

様々な事例を通して、美術館が刊行する逐次刊行物について考える

2.1. 美術館が刊行する逐次刊行物について

2.1.1 種類

年報・館報 / 紀要 / ニュース・たより / 研究報告・調査報告

2.1.2 それぞれの逐次刊行物の動向と問題点

【年報・館報】

内 容

- ・ 設立趣旨 / 沿革
- ・ 事業
展覧会 / 教育普及・イベント / 保存・修復 / 作品貸出 / 館外事業 / ボランティア・友の会の活動 / 出版物
- ・ 利用統計
入場者数
- ・ 所蔵資料
新収蔵 (作品・図書資料) / 所蔵資料の統計 (作品・図書資料)

・ 関係法規

・ 組織・職員

・ 利用案内

・ 研究・調査報告 [紀要を刊行しない館]

・ 個人の業績 (調査研究)

構 成

→データ中心 (表が多い) / 記述中心 / データの中に記述が入っている

レイアウトやページ数

→予算が厳しいのか？省力化なのか？

タイトル表示

→タイトル変更なのか？
単なる表紙デザインの変更なのか？

展覧会の出品リストを掲載しない

→本当に展覧会カタログを見れば良いのか？

新収蔵作品の写真を掲載しない

→作品同定の困難さ

目次がない / ノンブル表示がない

[論文を収載しているにもかかわらず]

→単なるミスなのか？

頒布先

→国立国会図書館、大学図書館、美術館

【紀 要】

継続刊行の困難さ

→収載論文が1点だけ、1~2号で休刊、合併号で刊行

頒布先

→国立国会図書館、大学図書館、美術館

【ニュース・たより】

位置付け・役割の変化

→広報媒体への移行、記事の収載、総目次

頒布先

→国立国会図書館、大学図書館、美術館

2.2 美術館は何故逐次刊行物を刊行するのか？

2.2.1 博物館法との関係

(博物館の事業)

第三条の六 博物館資料に関する案内書、解説書、目録、図録、年報、調査研究の報告書等を作成し、及び頒布すること。

(運営の状況に関する情報の提供)

第九条の二 博物館は、当該博物館の事業に関する地域住民その他の関係者の理解を深めるとともに、これらの者との連携及び協力の推進に資するため、当該博物館の運営の状況に関する情報を積極的に提供するように努めなければならない。

2.2.2 美術館の活動の成果をアピールする

匿名性 (無署名記事) と個人名表示の問題

2.2.3 情報の共有化

美術館員は、他館の逐次刊行物をどれくらい読んでいるのか？
情報の蓄積と検索の問題 / 総目次
頒布先について

3. 利用者としての美術館

美術情報にアクセスするための逐次刊行物の検索について (今回は和雑誌に限定)

3.1 美術雑誌・紀要のタイトル検索

・ 美術雑誌データベース
(アート・ドキュメンテーション学会美術雑誌 SIG)
http://www.jads.org/db/bijutsu_zasshi/search.htm

※1,307件。ただし、明治、大正、昭和戦前期の雑誌はよく調査されているが、比較的新しい雑誌や学会、美術館、大学等が発行する雑誌は収載されていない。
(アートトップ、絵、三彩、美術手帖など)

- ・東京文化財研究所蔵書目録5
(上)和雑誌目録編・(下)和雑誌索引編
(2004年12月末日現在)約3,000種

→東京文化財研究所ウェブサイトの「和雑誌データベース」
(最終更新日:2008年11月6日/
登録数:タイトル数2,704種、79,107冊)

3.2 雑誌記事・論文記事の検索

- ・日本美術年鑑(東京文化財研究所 各年で調査/最新:
2006年1月~12月の定期刊行物所載文献を収録)

→東京文化財研究所ウェブサイトの
「美術関係文献検索(試験運用版)」
※最終更新日:2008年10月6日/1966年~
2004年分268,627件

- ・雑誌記事索引 人文・社会編(国立国会図書館 1995
年まで冊子体で刊行)

→国立国会図書館ウェブサイトの
「雑誌記事索引」
※美術雑誌以外の雑誌に掲載された
雑誌記事を調べることができる

- ・総目次/目次総覧/総索引など

主なもの
美術関係雑誌目次総覧,小林忠編,国書刊行会,2000.5
「白樺」総目次[複製版「白樺」の別冊],深萱和男編,
臨川書店,1972.8 等々

3.3 美術雑誌の所在の検索

- ・美術図書館横断検索(Art Libraries' Consortium)

<http://alc.opac.jp/>

- ・NACSIS Webcat(国立情報学研究所)

<http://webcat.nii.ac.jp/>

- ・NDL-OPAC(国立国会図書館)

<http://opac.ndl.go.jp/>

3.4 パソコンによる雑誌記事・論文記事の申請・入手

- ・国立国会図書館の登録利用者制度
→郵送複写サービス

4. 整理・保管について

- ・他館が刊行した逐次刊行物

→整理・保管のためのスペースや人員があるのか
どうか

- ・自館が刊行した逐次刊行物

→実は、自館の逐次刊行物を一番使うのは自分たち

5. 最後に

美術館にとって「逐次刊行物」とは?

美術館の活動の実態を反映しているのは、逐次刊行物
なのかも知れない。

逐次刊行物に表れているのは、展覧会のような目立つ
活動だけではない、外からは見えにくい、日々の地道
な活動とその有り様なのかも知れない。

逆に言えば、逐次刊行物は、美術館がどんな活動をし
ているのか/してきたのかを知るための唯一の手がかり
でもある。

逐次刊行物を編集・制作する時に、私たちが持つのは、
その時々で消費される情報という意識であるのか、永
く残すべき記録という意識であるのか?

美術館に戻った時、自館の刊行している逐次刊行物を
手に取って、今どうなっているのか、昔はどうだった
のかを考えましょう。

1. AML 美術館の中の図書室は図書館界の中のどこに位置するのか

図書館の「館種」と機能組織

「公共」「学校」「大学」「専門」

専門図書館協議会

アート・ドキュメンテーション学会
ALC: Art Libraries' Consortium
ARLIS: Art Libraries Society

書誌情報は
[共有]して、[共有]しながら [共有]する



書誌データ共用装置としての書誌ユーティリティ
bibliographic utility

日本: NACSIS-CAT

2. 書誌情報の流通と共有・共有・共用

“資料”が使えるとはどういうことか
5つのポイントを整理しておこう

Publishing	資料の出版
Distribution	資料の配付 / 頒布
Cataloging	資料の目録化 (書誌データの作成)
Dissemination	書誌情報の配布 / 流通
Holding	[公開可能を前提とする] 資料の保有

労働集約型と考えられる Cataloging について

「書誌情報」はシェアするもの

なぜならば…

図書館の蔵書「目録」と美術館の藏品「目録」
Copy と非 Copy(Uniqueness)

一冊の本には一つの書誌情報が作成されれば、

← あとは…Copy cataloging
コピペもあり [というよりもコピペが基本]

3. 現代の図書館、ホットな話題
インターネットと図書館—相克は「館」の開放か希薄化か

3.1 旧来の文献アクセス

多くは、論文を読んでその註または参考文献を辿って
(芋づる式に) 探し始める ≡ 既知検索

OPAC(自館の、国立国会図書館、Webcat、ALC、地元の図書館、などなど)を検索

所蔵確認ができたなら所蔵館へ出向いて閲覧、Get!

3.2 Open Access の登場

機関リポジトリ (IR: Institutional Repository)
JAIRO (機関リポジトリ ポータル
Japanese Institutional Repositories Online)
CiNii

経由で文献アクセスして、
公開サーバ上の全文ファイルを Get !

3.3 Deep Web 浮上せよ
— Google クロール済みの CiNii

ググって全文 PDF 等 Get !

例:「岡倉天心による「泰西美術史」講義(明治二十九年)についての考察(その一)」



可視性(visibility)向上のための工夫、努力、競争
—publish of perish はSTMの世界だけでなく
評価の時代に入った美術館
← 業界内評価を越えなければ
UAP: Universal Availability of Publications なのだ!

3.4 相克は「館」の開放か希薄化か

「図書館には Google では探せない資料がある、
だから図書館を使おう、そしたら図書館は生き残れる」

↓
「図書館が提供できる資料は全部 Google で検索できるようにしよう、そうしたら図書館を使うだろう、ついでに図書館資料をデジタル化してwebに公開しよう、すべてのデジタル化が終わるまでは、そのプロセスの過程において [のみ] 図書館は生き残るだろう」

↓
利用者はデジタル化された資料が、図書館だろうが CiNii だろうが IR だろうが、「誰の提供か」は意識しない

参考:
「電子図書館と「館」の希薄化 - 物理的な、あるいは電子的な」
Min2-fly(last update 2008-05-16)
http://www.myopenarchive.org/documents/swffull/61
国立情報学研究所 "NIIPress07_4-1".
http://www.nii.ac.jp/kouhou/NIIPress07_4-1.pdf

4. AML の資料論と組織化論

4.0 AML における各論に入る前に
—何が困難なのか、課題なのかを考える

資料論	≡	資料知識
組織化論	≡	ノウハウ
環境	≡	人・もの・金・空間
ユーザ	≡	誰のための
Goal	:	ミクロとマクロ
貢献	:	国内 美術界 学術 一般 海外

4.1 AML における資料論

今回のセミナーはどちらかというと
AML の資料論から展開
「展覧会カタログ」「逐次刊行物」「二次資料」「一次資料」

AML の資料の多様性: 以下に主な参考文献
Pacey, Philip ed. *Art Library Manual: A Guide to Resources and Practice*. Bowker, 1978.

Ford, Simon ed. *Information sources in art, art history and design*. K.G. Saur, 2001.
Benedetti, Joan M. ed. *Art Museum Libraries and Librarianship*. Scarecrow Press, 2007.
水谷「美術情報」『情報探索ガイドブック情報と文献の森の道案内』勁草書房、1995.9、所収

4.2 AML における組織化論—「分類」と「目録(書誌データの作成及び OPAC について)」の要点

4.2.1 分類を考える — 図書館分類は「集類」

同種の主題の本を書架の同一の箇所を集める
「便宜的」な方法であって、
植物分類のような「学問分類」とは異なる。
「分類」というより「集類」である。

参考:
『情報選択の時代』リチャード・S. ワーマン著 松岡 正剛 訳
五つしかない情報の組織化の方法「究極の五つの帽子掛け」
L. 位置(location)
A. アルファベット(alphabet)=50音順
T. 時間(time)
C. カテゴリー(category)=分類
H. 連続量(hierarchy)小→大など
Latch=掛け金

「同一の箇所に集める」ことの必要性

ある： ブラウジングのため
検索のための目録が整備できないため
書架に余裕があるから
分類配架は常に 30% の空白が必要

ない： 検索のための目録が整備できる
OPAC が使える
検索画面でブラウジング
請求記号 (Call number) に従って
現物に到着可
書架に余裕無し
最も効率的な配架は空白のいらぬ配架
非分類配架 ≒ eg. 時順配架

以上を勘案して分類を考える
採用するならば NDC . 以下 1～2 桁

参考『東京都現代美術館所蔵展覧会カタログ目録 本文編 / 索引編』(同館、2000-2001)

4.2.2 目録を考える — 書誌データの作成から OPAC の公開へ

考えておくべき前提 ← 何にマンパワーを注ぐことが最大多数の最大幸福を生むか

- ・他館刊行物、商業出版物の書誌データはコピーして Excel、FM、図書館システム、何でも良いから貯める 盗用も可也 公開 / 検索のための手段 / 方法 / 工夫は多様にある
- ・自館刊行物の書誌データは、発行館の他にないと思いい作成する
- ・もしくは、発行館が作成せず、公開 / 検索可能な館へ委ね、共作、共有、共用のラインに載せることを考える

問 1 書誌データ作成の環境

- A: 全蔵書の書誌データを作成し公開するための人・金・空間がある
B: 自館刊行物に限れば書誌データを作成し公開するための人・金・空間がある
C: 蔵書の書誌データを作成する人・金・空間がない

A ならば：
既成図書館システム導入、OPAC 公開、NACSIS-CAT 参加、それが無理でも ALC に参加しよう

B ならば：
既存図書館システム導入、OPAC 公開、ALC に参加しよう、それが無理でも ALC に寄贈しよう

B ならば：
自館刊行物データをテキストで良いから HP に掲載公開しよう、その上で ALC に寄贈しよう

C ならば：
とりあえず、分類して棚に並べよう
そのためには何が必要で何が不要かをぎりぎりまで考えよう
ただし、自館刊行物を国立国会図書館と NACSIS-CAT に参加の ALC のいずれかに寄贈しよう
自館刊行物が自館外のどこかで、国立国会図書館、webcat、ALC で検索可能になれば良い

問 2 資料へのアクセス路要求

- A: 自席の PC で検索して
館の蔵書が把握できればよい
B: 主題ごとに分類された棚の前に行って
本を探したい ブラウジングしたい

A ならば：
OPAC 必要 棚が無くても何とかなる

B ならば：
OPAC 不要 しかし 分類配架が必要 棚に余裕が必要

問 3 書誌データの公開要求

- A: 検索は美術館内部だけで良い インターネットに公開するなんてとんでもない
B: 検索は広く世界から OPAC はインターネットに公開するのが当然

A ならば：
イントラネットで html を作り Ctrl+F でも検索可
元は Excel でも FM でも何でも良い

B ならば：
最低限の既存図書館システムの導入を OPAC 公開
サーバは ASP でも可 ALC の半数は opac.jp

5. 美術館の中のライブラリの機能構造化のための尺度を考える

- マンパワー
- 蔵書の量
- 保管のスペース
- 利用者像
- 美術館のパブリッシング力
- 他機関依存可能性

6. OPL の見切りについて — 誰の、誰による、誰のための図書館 何を残すか、何を担うか

OPL: One Person Library / Librarian

One Person を確保するための作戦を

当面の Goal として

「自館刊行物を共有財にするための課題と責任」

から発想してみよう！



これを実現すれば

日本の美術館の MP の UAP は実現する

第IV講 「電子的リソース (二次資料)」

2009.11.11 (水) 9:40-11:00 於、国立西洋美術館 第一会議室

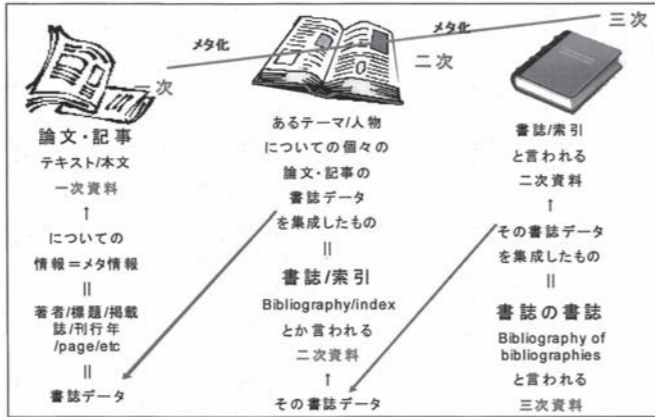
水谷 長志 (東京国立近代美術館)

1. 資料・情報のn次性—「第二の知識」藤川正信著『第二の知識の本』新潮社 1963

Knowledge is of two kinds. We know a subject ourselves, or we know where we can find information upon it.
James Boswell. *The Life of Samuel Johnson*. 18 Apr. 1775.

「知識には二種類あって、我々は或る主題を自分で知るか、それともこの主題についての情報がどこでえられるかを知るかです。[我々が何かを調べようと思う時にまず最初にせねばならぬことは、いままでにどんな本がこの主題を取扱ったかを知ることで、我々がカタログを検索したり、図書館の書物の背表紙を通覧するのはこのためです。]」

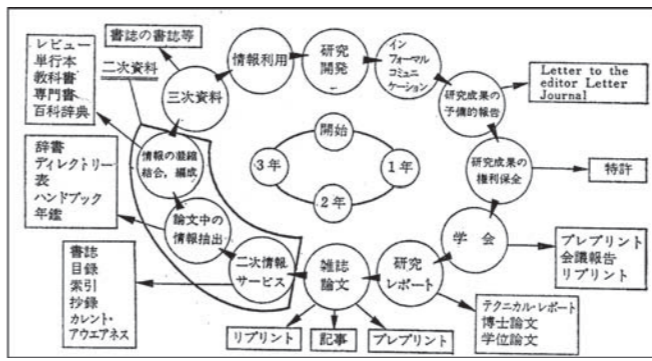
図書館機能の本質：
忘れてはならないこと / 頭に入れておくこと



2. レファレンス・ツール概観*

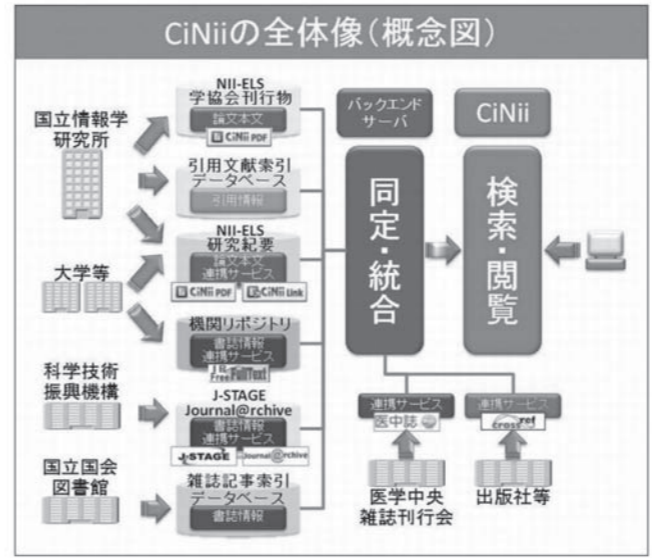
種類	紙媒体:事例	Web媒体:事例	
一般的 包括的 二次資料	全国書誌	『日本全国書誌』Japan/MARC National Bibliography など	国立国会図書館 OPAC
	販売書誌	『日本書籍総目録』『出版年鑑』 Books in Print など	http://www.books.or.jp/ Amazon?
	所蔵目録	『国立国会図書館蔵書目録』など	国立国会図書館 OPAC
	総合目録	『学術雑誌総合目録』など	Webcat
	叢書集成索引	『現代日本文学総覧シリーズ』など	日外アソシエーツ
	一般記事索引	『国立国会図書館雑誌記事索引』など	国立国会図書館雑誌記事索引 NII CiNii**
	百科事典	『平凡社世界百科事典』など	オンライン百科事典
専門的 関連主題の 二次資料	主題書誌 個人書誌	掲載媒体は様々	
	専門記事索引誌 専門記事抄録誌 A&I Service (Abstracting & Indexing)	『日本美術年鑑』に掲載のもの Art Index BHA ABM DAAI etc.	東文研「美術関係文献検索 (試験運用版)」 Art Index BHA ABM DAAI etc.
	総目次・総索引	『みづる』ほか様々 『美術関係雑誌目次総覧』国書刊行会 『現代の眼』	東近美アートライブラリ閲覧端末『現代の眼』総目次検索***
	総目次の総覧	『日本雑誌総目次要覧』	
	専門事典・便覧	『新潮世界美術辞典』 TDA	OAO: Oxford Art Online
三次資料	書誌の書誌	『美術家 書誌の書誌』 勉誠出版	
参考図書の 解題書誌	『日本の参考図書』 Guide to Reference Books Guide to the Literature of Art History		

K. Subramanyan of the Scientific Literature 学術の螺旋的發展



* インターネットで文献探索 実践女子大学図書館 などでお復習いを
http://www.jissen.ac.jp/library/frame/index.htm

**CiNii のこと 国立情報学研究所 NII 学術系コンテンツサービス
http://www.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&page_id=84
を一度ご覧下さい 特に IR, JAIRO, CiNii, PORTA(NDL) の関係を整理しておくこと何かと重宝



データベース名 (提供機関)	略号	解説	収録件数/収録雑誌
NII-ELS 学協会刊行物 (国立情報学研究所)	NII-ELS	◎論文本文へのリンクあり ◎抄録が本誌に収録 国内の学協会が発行する学術雑誌に掲載された論文について、ページをその雑誌のPDF形式として蓄積。本文の参照を可能にしたデータベースです。 ※本データベースの一部は科学研究費補助金(研究成果公開促進費)データベース(学術発表プラットフォーム)電子ファイルおよび電子図書館蔵書データベース、臨床症例データベースの交付を受けて作成しています。 収録期間は雑誌により異なります(電子化刊行された期間による)	約202万件 収録雑誌一覧
NII-ELS 研究紀要 (各大学の共同入力)	NII-ELS	◎一部論文本文/外部リンクあり ◎一部抄録あり 国内の大学が発行する研究紀要に掲載された記事情報を収録したデータベースです。 収録期間は雑誌により異なります	約96万件 収録雑誌一覧
引用文献索引データベース (国立情報学研究所)	CP書誌 CP引用: 注1)	◎引用情報あり 国内の自然科学分野の学術論文誌・学協会刊行物に掲載された論文について、論文とその論文が引用している文献との関係がわかるようリンクされたデータベースです。 収録期間は1992年〜、雑誌により異なります	書誌:約147万件 引用:約1593万件 収録雑誌一覧
雑誌記事索引データベース (国立国会図書館)	NDL: 注2)	◎書誌情報のみ 国立国会図書館が収集する国内刊行物の雑誌のうち、学術誌・大学紀要・専門誌を中心として、人文・社会・科学・技術/医学・薬学と、あらゆる分野の記事に関するデータを収録した国内最大の記事索引データベースです。	約807万件 収録雑誌一覧 (国立国会図書館蔵書目録)
機関リポジトリ (各大学)	IR:	◎論文本文へのリンク	約23万件
J-STAGE, Journal@rchive (独立行政法人科学技術振興機構)	J-STAGE Journal@rchive:	◎論文本文へのリンク	約4万件

2009年4月現在

3. 日本の美術界の二次資料とその電子化 左頁表斜体

*** 個別館 OPAC 中の (雑誌) 記事情報 東近美 OPAC の場合：
東近美開催展カタログ所収論文等記事 / 東近美研究紀要 / 現代の眼 / 愛知県美研究紀要 / 構造 / 近代画説 / 西洋美術研究 / 横浜美研究紀要 / 美術フォーラム 21 / 西美研究紀要 etc.

4. 海外の美術界の二次資料とその電子化 左頁表斜体

Matsumoto Shunsuke
09478 Shunsuke Matsumoto exhibition 1986. Tokyo: National Museum of Modern Art (5 April-15 June 1986)/Iwate, Japan: Iwatekenmin Kaikan (28 June-20 July 1986)/Shimonoseki, Japan: City Art Museum (26 July-24 Aug. 1986). Organized by Tokyo Shimbun and Iwate Nippo. Kunio Motoe, Tōru Asano. 244p. Also in Japanese. 304 illus. (159 col.) biog. bibliog.

Catalogue to an exhibition of paintings and drawings by Shunsuke Matsumoto (1912-48), with two essays. Motoe discusses Matsumoto's choice of style and subject matter, with particular emphasis on his cityscape paintings, and noting the influence on him of Modigliani, and the montage technique which is reminiscent of Hideo Noda. There is also a short essay by Asano (in Japanese only) on Matsumoto's essay 'A living painter'.

図6 A B M抄録例<展覧会カタログ>
「松本峻介展」1986 於、東京国立近代美術館 他
Vol. 19, No. 2(1988)より

表1 主要抄録・索引誌およびオンライン・データベース

タイトル	RAA	Art Index	A B M (LOMA*, 1969-70)	R I L A	BHA
プロデューサー	CNRS**, FRA	H. W. Wilson, USA	ABC-CLIO, GBR	J. P. Getty Trust, USA	Getty, USA; CNRS**, FRA
冊子体発行頻度	V. 1(1910)-V. 80(1990)	V. 1(1930)+	V. 1(1969)+	V. 1(1970)-V. 15(1990)	V. 1(1991)+
収録件数/年	+/- 10,000	+/- 20/23,000	13,000	+/- 10,000	24,000? ***
収録誌数/巻	+/- 500	---	+/- 300	208/267 (Vol. 1, No.1/2)	4,000? ***
収録誌数/年	+/- 2,100	+/- 230	500	+ 500	4,000? ***
累積索引版		annual index	5 year index (1969-84)	V. 1/4 (1975/79)	annual index (1992? -)
Index: Author	○	○ Subjectと混在	○	○	○
Index: Subject	○ French	○ English	○ English	○ English	○ English / French
Index: その他	Artistes	Book Review Index	Periodicals	Journal	Journal
#		Museum and Gallery			
ディストリビュータ	QUESTEL (Chap. 190; online)	WILSONLINE, CD-ROM	DIALOG (File 56)	DIALOG (File 191)	DIALOG (File 190; QUESTEL)
オンライン・データ	1973+	1984+	1973+	1973+	1973+
更新頻度	4/year	2/week (CD 4/yr)	2/year	2/year	4/year
データベース収録	208,000/ QUESTEL	198,000/ WILSONLINE	391,000/ ABC-CLIO	191,000/ RIL	191,000/ BHA

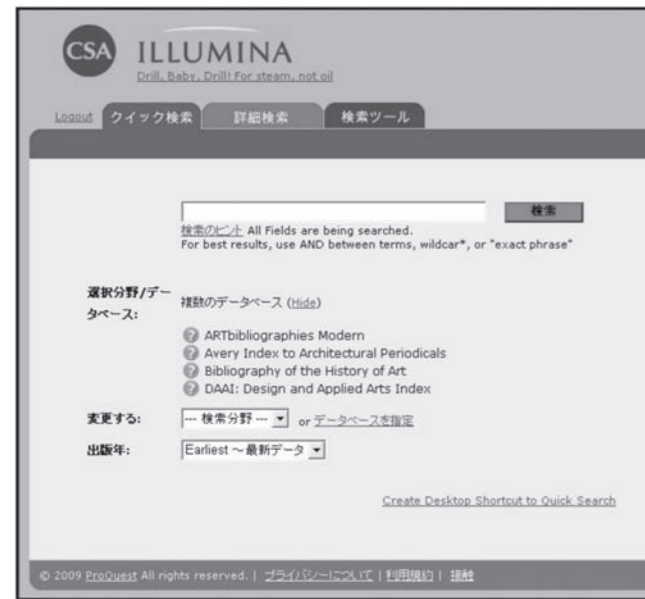
水谷「美術研究における抄録・索引誌の動向—BHAの創刊をめぐる」『ファッションドキュメンテーション』2号, 1992.6, p.39-54.

東京国立近代美術館アートライブラリ ****にて利用可能海外美術情報データベース

http://www.momat.go.jp/art-library/foreign_art_db.html

- ABM: Artbibliographies Modern on WEB/CSA Illumina 版
⇒ 近現代美術のための抄録・索引情報/1974-Current【詳しくは】 by CSA
- Avery: Avery Index to Architectural Periodicals/CSA Illumina 版
⇒ 建築のための抄録・索引情報/1934-Current【詳しくは】 by Avery
Architectural & Fine Arts Library of Columbia Univ., New York
- BHA: Bibliography of History of Art on WEB/CSA Illumina 版
⇒ 西洋美術全般のための抄録・索引情報/1973-Current【詳しくは】 by AHIP/J. Paul Getty Trust & INIST/CNRS Sterling & Francine Clark Art Institute

■ DAAI: Design and Applied Arts Index on WEB/CSA Illumina 版
⇒ デザインのための抄録・索引情報/1973-Current【詳しくは】 by DAAI



■ の ABM, Avery, BHA, DAAI/CSA Illumina 版は横断検索可能

● TDA :Grove's The Dictionary of Art on WEB

⇒ グローブ社美術事典の WEB 版【詳しくは】

**** 美術図書館学, アート・ドキュメンテーション関連文献のためのクリアリングハウス機能を持ち, 特に ARLIS, VRA 関連文献を網羅的に収集している

国立西洋美術館研究資料センターで利用可能な他の海外書誌情報データベース

- Art Index
- Art Index Retrospective: 1929-1984
- Art Sales Catalogues Online

※ JSTOR は東京国立近代美術館, 国立西洋美術館とも利用可能
詳しくは第 V 講 (川口) にて

5. 日本の美術館の資料活動が目指す二次情報提供サービスの構築について

問 1 とりあえずは美術館で

A: 東京文化財研究所の活動 (研究資料データベース検索システム) と協調路線を強化する
<http://archives.tobunken.go.jp/internet/index.html>

B: とりあえず射程に置かない

B: で仮説する

総論: 自館刊行物を共有財にするための課題と責任
Access to Museum publications

「自館刊行物へのアクセス可能性は保証されているか」を問う

問 2 自館刊行物へのアクセス保証するか

A: 自館刊行物へのアクセスを自館で保証する
→ がんばりましょう!
visibility の向上はさておいて

B: 自館刊行物へのアクセスを他館の公開ライブラリに委ねる
→ 国立国会図書館へ寄贈する
→ ALC 参加館へ寄贈する

問 2 が A: B: だとすると, 「アクセス可能性は保証されているか」をさらに問う

問 3 アクセスの質を高める

A: ものとしての刊行物があれば良い

→ 棚に並んでれば良いじゃん

B: ものとしての刊行物の目録情報があれば良い

→ 問 2 B: への処方でも可能

C: 中身 (収載論文 / 記事にまで及んだ) の書誌情報の検索可能性を保証しなければ, 「アクセス可能性は保証」とは言えないと, レベルを上げる

→ これからの課題

試み: 前記の *** 個別館 OPAC の中の (雑誌) 記事情報 東近美 OAPC の場合:
東近美開催展カタログ所収論文等記事 /
東近美研究紀要 / 現代の眼 / 愛知県美研究紀要 / 構造 / 近代画説 / 西洋美術研究 / 横浜美研究紀要 / 美術フォーラム 21 / 西美研究紀要 etc.

計画: 東京国立近代美術館機関リポジトリ (試作中)

・ 全米加盟館のニュース, 紀要, 年報 所載論文 / 記事情報の一元的検索機能

・ 全米加盟館の展覧会カタログ 所載論文 / 記事情報の一元的検索機能

・ 上記対象の全文データ公開

すなわち 東京国立近代美術館機関リポジトリ
独立行政法人国立美術館機関リポジトリ
○○美術館機関リポジトリ
→ JAIRO → CiNii

1. はじめに

第IV講の「電子的リソース (二次資料)」でみつかった文献は、どのように入手できるだろうか。従来は館内外の図書館で探すか、ドキュメント・デリバリー・サービスを受けるかであったが、近年はこれに加えてインターネット上で有料・無料で入手できる文献が増えつつある。本講義では、学術情報流通をめぐる状況を視野に入れつつ、美術館での調査研究に役立つ電子的リソースを具体的にみる。

2. 電子ジャーナル

2.1 学術雑誌の一般的傾向

電子ジャーナルとは、冊子体で発行された雑誌を電子化したもの、もしくは全く新しく電子版だけが存在する雑誌的な電子出版物の総称である。多くはPDF形式で提供されており、印刷すれば、図書館で冊子体をコピーしたものと大きくは変わらない。

海外では、学術雑誌の多くが出版社から発行されており、STM分野(科学、技術、医療)を中心に流通のオンライン化が進んでいる。美術分野においても、僅かだが「冊子体のみ」の定期購読形式から「冊子体+オンライン(有料または無料)」形式に移行したタイトルがある(例: Museum International, October など)。

一方、国内の学術雑誌は、学協会発行のものや大学が発行した研究紀要が中心である。電子化は欧米圏に比べて遅れている。

2.2 電子ジャーナルのプラットフォーム

電子ジャーナルはどのような方法で提供されているのだろうか。電子ジャーナル提供の仕組みを雑誌ごとに開発するのは効率的でないため、広く行われているのは複数の電子ジャーナルをまとめて共通のプラットフォームで提供する方法である。

電子ジャーナルのプラットフォームには、出版社が提供するものと(出版社系)、複数の出版社の雑誌を提供するもの(アグリゲーター系)の2種類がある。後者では、発行されてから全文(フルテキスト)が掲載されるまでの猶予期間「エンバーク」が設けられることがある。

- JSTOR
<<http://www.jstor.org/>>



米国非営利団体による学術雑誌アーカイブ。創刊号から過去1年~5年前の号まで、フルテキストの利用が可能。有料だが、美術館・博物館の価格体系は大学よりも有利。全1,604誌中、美術分野はThe Art Bulletin、The Burlington Magazine、The Metropolitan Museum of Art Bulletinなど英米圏内の主要美術雑誌を含む125誌。契約形態はサイト・ライセンスによる。

- 詳細については下記サイトを参照のこと:
<<http://www.usaco.co.jp/products/jstor/>>

- NII-ELS
<<http://ci.nii.ac.jp/>>



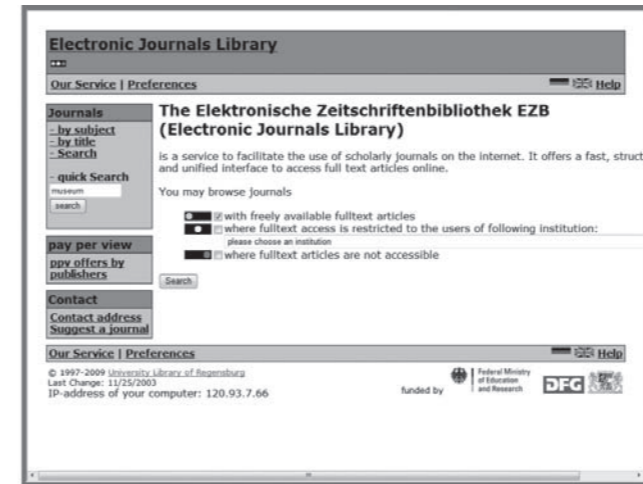
国立情報学研究所による電子化事業(Electronic Library Service)で、国内の学協会が発行する学術雑誌

誌、国内の大学等が刊行する研究紀要などを対象に、本文を電子化し蓄積したもの。検索は、CiNiiあるいは後述のPORTAから可能。収録される6,920誌中、美術分野では『五浦論叢』、『美学』、『武蔵野美術大学研究紀要』など。

- 有料公開の雑誌もあり、その利用方法については下記サイトを参照のこと:
<http://ci.nii.ac.jp/info/ja/service_outline.html>。

2.3 どのような電子ジャーナルがあるか

- Electronic Journals Library
<<http://rzblx1.uni-regensburg.de/ezeit/index>>



どのような学術雑誌がオンラインで提供されているかを検索するためのサイト。論文単位の検索はできない。ドイツのレーゲンスブルク大学による。53,681誌の雑誌名が収録されており、美術分野はそのうち573誌。

トップページで「青信号」のみにチェックすると、無料で入手可能な雑誌のみに絞り込んで検索することも可能。雑誌名をクリックすると、提供サイトへアクセスできる。

3 オープンアクセス

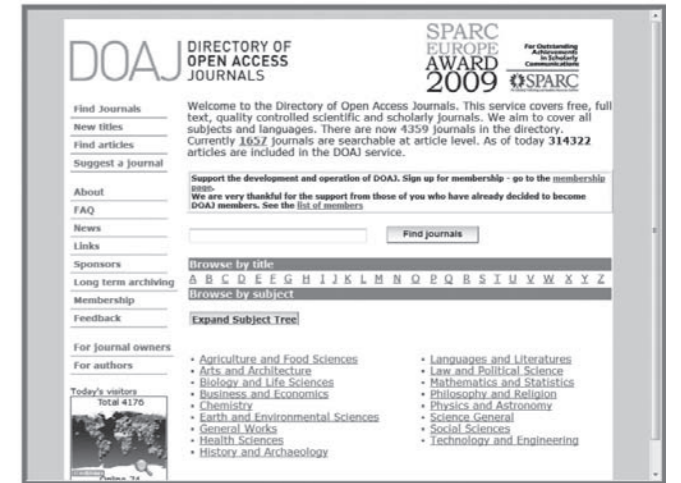
3.1 オープンアクセス運動

上述の既存の学術雑誌の電子化とは異なる流れとして、「オープンアクセス」と称される学術情報流通電子化の動きがある。オープンアクセスの定義は次の通りである。「査読された雑誌論文で、広くインターネット上で無料で利用でき、(中略)すべての利用者に閲覧、ダウンロード、コピー、配布、印刷、検索、リンク、索引化のためのクロール、ソフトウェアへのデータの取り込み、その他合法的な目的での利用を財政的、法

的、技術的障壁なしに許可する」(BOAI: Budapest Open Access Initiativeより)。

3.2 オープンアクセス・ジャーナルの検索

- DOAJ: Directory of Open Access Journals
<<http://www.doaj.org/>>



オープンアクセス・ジャーナルの検索が可能。スウェーデンのルンド大学による。4,378誌中、芸術・建築は113誌。

- DOAJJ: Directory of Open Access Journals in Japan
<http://jcross.jissen.ac.jp/atoz/index.html?b_type=AtoZ>



日本のオープンアクセス・ジャーナルのディレクトリ。実践女子大学図書館による。約11,827誌。

3.3 機関リポジトリの検索

機関リポジトリとは、大学等の学術機関が生み出した電子的資料を収集・保管し、広く提供するシステムのこと。国内最初の例は千葉大学「CURATOR (Chiba University Repository for Access to Outcomes from Research)」。

機関リポジトリの検索については、各大学のサイトで個別に検索するのではなく、次に示すように複数のサイトを横断的に検索できる方法がある。

- ・ OAIster
<<http://www.oaister.org/>> (2010年1月までに移転予定)



全世界の機関リポジトリの情報を集約し、横断的な検索を可能にするシステム。ミシガン大学の開発による。電子化された図書、論文、ポーンデジタルの文献、音声ファイル、画像ファイル、動画ファイルなどの検索が可能。2009年1月には OCLC とのパートナーシップが発表された。

データ提供数は 1,139 機関、23,094,888 件。

- ・ JAIRO: Japanese Institutional Repositories Online
<<http://jairo.nii.ac.jp/>>



日本の学術機関リポジトリに蓄積された学術情報を横断的に検索可能。国立情報学研究所による。データ提供数は 128 機関、732,001 件。

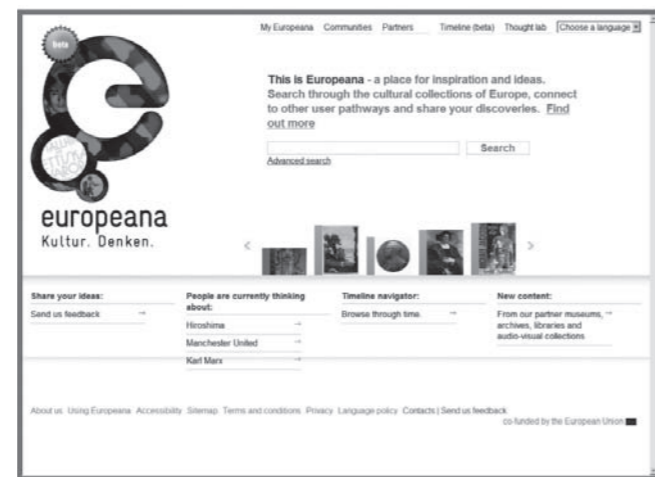
4 その他のリソース、関連ツール

- ・ arthistoricum.net
<<http://arthistoricum.net/>>



ヨーロッパの美術史情報資源サイト。ミュンヘンの中央美術史研究所とハイデルベルク大学図書館の共同プロジェクトによる。ブルクハルトの『チチェローネ』など、美術史学史に関わる古典的美術書のフルテキストへのリンク集 (Thematic Portal: History of Art History) がある。

- ・ europeana
<<http://www.europeana.eu/portal/>>



欧州の文化遺産を検索できる図書館ポータル・サイト。約 460 万点のテキスト (図書、新聞、書簡、日記、アーカイブズ資料)、画像 (絵画、版画、地図、写真)、音声、映像などの検索が可能。

- ・ PORTA
<<http://porta.ndl.go.jp/>>



国立国会図書館による、国内各機関が公開するデジタルアーカイブを横断的に検索するシステム。検索対象には、CiNii や JAIRO、「近代デジタルライブラリー」(国立国会図書館所蔵の明治期・大正期刊行図書をデジタル化し蓄積したもの)などが含まれる。トップページの「デジタルアーカイブ」のみにチェックをすれば、本文の閲覧が可能な資源のみに絞り込んで検索できる。

- ・ NDL-OPAC の「Database Linker」
<<http://opac.ndl.go.jp/>> (NDL-OPAC のサイト)



国立国会図書館 OPAC 上で、検索結果表示に外部データベースへのリンクを表示するツール。ウェブ上で本文が無料提供されているものであれば、国立国会図書館外からでも直接アクセスが可能。

参考文献

倉田敬子『学術情報流通とオープンアクセス』東京：勁草書房、2007。

日本図書館情報学会研究委員会『学術情報流通と大学図書館』東京：勉誠出版、2007。

「オープンアクセスジャーナルリンク集」(国立国会図書館リサーチ・ナビ) 2009年5月10日

<http://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-honbun-400309.php>

「無料電子雑誌論文の見つけ方」(国立国会図書館リサーチ・ナビ) 2009年5月10日

<http://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-honbun-400134.php>

「著者所属機関の機関リポジトリで灰色文献を探す」(国立国会図書館リサーチ・ナビ) 2009年5月10日

<http://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-honbun-400156.php>

*本稿に記したウェブページ URL および統計データは全て 2009年10月22日現在。

1. 作品情報発信の現状

2005年4月～5月、インターネットへの情報発信に関する調査を情報資料研究部会が行なった。348館にアンケートを送付し、222館から回答を得た。そのうち、73館から作品情報を発信しているとの回答があった。2009年10月にそれら73館の作品情報の発信の状況について追調査した。結果、10館がサービス休止中であり、残りの63館をサービスの形態ごとに分類すると、

「キーワード検索」型・・・	23館
「索引」型・・・	4館
「紹介」型・・・	36館

という内訳となった。「キーワード検索」型は作家名や作品題名などのキーワードを入力することによる検索であり、「索引」型は作家名の頭文字を選択することや作品題名、制作年、ジャンル等による「索引」から作品情報を探す方法を指す。作品情報は1作品、1ページ (URL) となっている場合が多い。「紹介」型は所蔵品のうち、主たる作品を紹介しており、その紹介数は10数点から数十点である。

また、2005年時点では作品情報を発信していなかった館について、情報発信の状況を調査したところ、「キーワード検索」型が3館、「索引」型が7館、「紹介」型が4館増えていた。以上をまとめると、

「キーワード検索」型・・・	26館
「索引」型・・・	11館
「紹介」型・・・	40館

よって、2005年時点で「検索可能な形で情報発信している館」は27館 (12%) であったのが、2009年には10館増え、37館 (17%) となっており、「紹介」型をあわせると222館中35%の館で何らかの形で作品情報の発信を行っているという結果が得られた。(なお、「作品情報の発信」を行っていない館でも、ほとんどの館が所蔵作品の特色を紹介するページなどにおいて、所蔵作品を紹介している。しかし、作品個々の情報を発信しているとはいえないので、本稿では「作品情報を発信している」館としては数えていない。)

「キーワード検索」型の情報発信を行なっている館のうち、国立美術館4館は「所蔵作品総合目録検索システム」を構築し、検索機能を1つのシステムに集約し提供している (国立西洋美術館では独自システムでの検索サービスも提供している)。また、千葉県、鹿児島県などにおいては地域の美術館、博物館、資料館

などの情報を集約して検索可能とする「デジタルミュージアム」など「集約」型のサービスがあり、そのような「集約」型サービスを利用して作品情報を発信している館もある。特に文化庁の「文化遺産オンライン」に作品情報を提供し、それにより検索サービスを実現している館もあった。自館ですべてをまかなうのではなく、外部サービスを利用している点は注目される。

また、情報発信を行っている館77館についてみると、「索引」型または「紹介」型が多いが、これらの方法は作品情報をHTMLファイルとして作成し、「索引」ページからリンクするという比較的に容易な方法で構築可能なので、採用している館が多いと思われる。(以上の結果は2005年の調査対象館のうち、回答があった222館について再調査した結果に基づくものである。2005年の調査に未回答であった館もふまえて更なる調査が必要であることを付記する。)

2. 作品情報発信の手法

「索引」型の所蔵品データベースを提供している練馬区立美術館の所蔵品の一つ、籀木清方の「道成寺」をGoogleで「籀木清方 道成寺」と検索すると同館の所蔵品データベースのページが検索可能である。

この例は、作品情報をHTMLファイルなり、PDFファイルなり、テキストファイルなりで作成し、インターネットからアクセス可能なサーバーに置き、Googleから検索可能とすれば、それで検索が実現されるを示唆する。Googleなどが提供する「サイト内検索」を使えば、自館のウェブサイト内のみが検索対象となるので、検索精度が増す。

そこで、1作品1ウェブページとしての情報発信が「主流」である状況を考え、

- ・1作品1ウェブページとして公開。検索は外部サービスを活用。

- ・作品情報の記述形式として、HTMLより汎用性や再利用性の高い形式 (XML形式) を採用して、将来的に国立国会図書館が提供するPORTAのような情報検索サービスにも情報を提供可能な拡張を持つようにする。

という視点で作品情報の発信の方法について述べる。

3. XML形式による作品情報の記述

まず、作品情報を情報システムでも取り扱いやすい形式で記述する方法について述べる。作品情報は、例1～3のようなテキストとして記述されているであろう。

例1
岸田劉生
道路と土手と塀 (切通之写生)
大正4年 油彩・キャンバス・額・1面 56.0×53.0
右下に署名、年記; 左下に署名
2回草土社展 (「切通しの写生」) (東京、玉木美術店 1916)
昭和53年度 文化庁 管理換 OI0002
東京国立近代美術館

例2
富本憲吉
白磁珈琲器
昭和8年 磁器・ポット・3ポット:h21.5 D23.5;
砂糖壺:h12.5 D11.5; ミルク入れ:h11.7 D12.5
昭和57年度 購入 Cr0247
東京国立近代美術館

例3
高嶺格
God Bless America
平成14年 ヴィデオ・インストールン・1
現代美術への視点 — 連続と侵犯 (東京国立近代美術館 2002)
平成15年度 購入 S00389
東京国立近代美術館

いずれも、「独立行政法人国立美術館 所蔵作品総合目録検索システム」で公開されているデータであり、以下のような項目から構成されている：

- ・作家名
- ・題名
- ・制作年
- ・技法・支持体・形状・員数
- ・大きさ
- ・署名・落款
- ・初出
- ・受入年度
- ・受入方法
- ・作品番号
- ・所蔵

このようなテキストファイル (またはHTMLファイル) をインターネットに接続したサーバーに配置しておけ

ば、前述のようにいずれはGoogleなどの検索エンジンから検索可能となるが、

- ・見栄えのよいページデザインとしたい。
- ・ページのデザインを一括して変更したい。
- ・ページにデザインにバリエーションを持たせたい。(例えば、作品情報から作家一覧を自動的に作り、そこから各作品情報にリンクさせたい。)
- ・将来的にはGoogleなどによる全文検索だけではなく、特定の項目 (例えば作家名) で検索したい。
- ・外部の情報検索サービスに情報を提供し、検索される機会を増やしたい。

などといったニーズには応えにくい。

例のような通常のテキストではなく情報システムが自動処理しやすい形式で作品情報を記述しておけば、さまざまな処理が可能となり、利用範囲が広がる。

「自動処理しやすい形式」といってもそれほどおおげさなことはない。ヒトはテキストの文脈などから、どこに何が書かれているかを認識できるが、情報システムは人ほどのテキスト認識能力を備えていないので、情報システムにも「読みやすい」ように、テキストのどこからどこまでがどの項目に該当するか、はっきりさせることだけである。すなわち、

- ・データの項目の範囲 (テキスト中のどこから、どこまでか)
- ・データの項目の名前

の2つをテキスト中に明示するということである。

さらに「住所」のように1つの項目が複数の要素 (小項目) から成っている場合には、

住所 = 郵便番号 + 都道府県名
+ 市区町村名 + 番地 + 建物名

1つの欄の内部をさらに分割して、個々の小項目についても範囲や名前をはっきりさせることも重要である。

以上のようなポイントを押さえて、作品情報を記述してみる。ここでは例1に「作品解説」を追加し、各データに項目名を追加したデータを材料とする。

例4
作家名：岸田劉生
題名：道路と土手と塀 (切通之写生)
制作年：大正4年
技法等：油彩・キャンバス・額・1面
大きさ：56.0×53.0
署名等：右下に署名、年記; 左下に署名
初出：2回草土社展 (「切通しの写生」) (東京、玉木美術店 1916)
受入年度：昭和53年度
受入方法：文化庁 管理換

作品番号：O10002
所蔵：東京国立近代美術館
作品解説：この絵は、1915年11月5日に10日間くらいかけて描きあげたもので、劉生はこれを「クラシツクの感化」すなわち西洋の古典的絵画の影響から脱しはじめ、再び「ぢかに自然の質量そのものにぶつかつてみたい要求が目覚め」て生まれた風景画の一つに挙げている。
出典：
近代日本の美術 東京国立近代美術館所蔵作品選
1984年
p.202

上記の記述には、情報システムにとってわかりやすくするためには、いくつかの問題がある：

- ・改行が項目の終わりとなっているが、データ中に改行を含んでいるものがあり、データ途中の改行が項目を終わりであると「誤解」される。
- ・「技法・支持体・形状・員数」の内容はどの部分が技法なのか明確になるように記述したい。
- ・「大きさ」もどちらが縦でどちらが横かなどを明確にしたい。
- ・そもそもこれらの項目が1つの作品を示していることも明示したい。

そこで、項目の終りを明示し、複数の情報から成る項目は小項目に分割してみることにする。項目の終りを含んだ表現としては、

```
<項目名>・・・内容・・・改行してもOK  
・・・・・・・・内容・・・改行してもOK  
・・・・・・・・内容・・・</項目名>
```

とする。<項目名>が項目の先頭を示し、</項目名>が項目の末尾を示す語句である。(冗長に感じられるかもしれないが、どの項目の末尾であるかを明示するために、末尾をあらわす語句にも項目名を含ませる。)また、作品情報全体の範囲を明示するために<作品情報>という語句で全体を括ることとする。

```
例5  
<作品情報>  
<作家名>岸田劉生</作家名>  
<題名>道路と土手と塀(切通之写生)</題名>  
<制作年>大正4年</制作年>  
<技法等>  
  <技法>油彩</技法>  
  <支持体>キャンバス</支持体>  
  <形状>額</形状>  
  <員数>1面</員数>  
</技法等>  
<大きさ>  
  <縦>56.0</縦>  
  <横>53.0</横>  
</大きさ>
```

```
<署名等>右下に署名、年記；左下に署名</署名等>  
<初出>2回草土社展(「切通しの写生」)(東京、玉木美術  
店1916)</初出>  
<受入年度>昭和53年度</受入年度>  
<受入方法>文化庁管理換</受入方法>  
<作品番号>O10002</作品番号>  
<所蔵>東京国立近代美術館</所蔵>  
<作品解説>この絵は、1915年11月5日に10日間くらい  
かけて描きあげたもので、劉生はこれを「クラシツクの感  
化」すなわち西洋の古典的絵画の影響から脱しはじめ、再び  
「ぢかに自然の質量そのものにぶつかつてみたい要求が目覚  
め」て生まれた風景画の一つに挙げている。  
出典：  
近代日本の美術 東京国立近代美術館所蔵作品選  
1984年  
p.202</作品解説>  
</作品情報>
```

例5の形式はXML(Extensible Markup Language)と呼ばれる情報の記述形式である。

"Markup Language"とは、上記の例のようにテキスト中に語句(上記の例の<作品解説>など)を追加して、テキストの自動処理を可能にする方法であり、XMLではそれら語句をテキストの目的や用途に応じて自由に付けることができる。なお、"Extensible"でない"Markup Language"の例が"HTML(Hypertext Markup Language)"である。HTMLではウェブブラウザでの表示のために"<h1>"や""などの"語句"をテキストに挿入していくが、これらの語句は規格化され、そのような意味で拡張可能(Extensible)ではない。

このXML形式で作品情報(もちろん、図書情報でも展覧会情報でも)を記述すると、情報システムで利用しやすく、かつ、ヒトにとってもテキストとして可読であるので、汎用性や可搬性、長期保存性を備えた情報表現の形式として、非常に有効である。

XML形式で情報を記述する際に用いる<作家名>や<題名>などの語句を「XML要素」と呼ぶ。XML要素の選び方、決め方はExtensibleゆえに自由であり、美術館ごとに項目立てやその名称を定めればよい。

4. XMLにおける「語彙」—XML要素の選び方

作品情報を交換したり、一箇所に集めて横断的に検索する際などには、記述する際に使用するXML要素の「語彙」を一つに定め、その「語彙」を用いて作品情報を記述した方がよい場合がある。そのような「語彙」として利用できるものには

- ・Dublin Core
- ・RSS2.0

などがある。

RSSを用いた情報発信は本稿の最後で述べる国立国会図書館のPORTAへの情報提供にも使われるが、本来、作品情報を記述するための語彙ではないため、保存用のデータは別な語彙(各館オリジナル)で記述し、

情報提供用にRSSを語彙としたデータを生成するのがよい。なお、共通した「語彙」を使用することは必須ではない。ある「語彙」で記述されたXML形式のテキストを他の「語彙」のXML形式のテキストに変換することができる。

5. 「語彙」の変換 —XSLTによるXML形式テキストの変換

XML形式のテキストを"XSL Transformations (XSLT, XSL = Extensible Stylesheet Language)"という仕組みを用いて、テキスト中で使っているXML要素を別な語彙のXML形式テキストに変換可能である。

XML形式のままではウェブブラウザに表示しても味気ないが、XSLTを用いてXML形式のテキストから任意の要素を取り出して、それらをXHTML形式のテキストに変換し、CSS(Cascading Style Sheets)ファイルと組み合わせることにより、見栄えの良いページを生成することができる(例5をXHTMLに変換するXSL形式テキストの一例を例6に示す)。本稿では紙数の関係により詳細を述べることができなないので、具体的には講演時に述べる。

```
例6  
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>  
<xsl:stylesheet  
  xmlns:xsl="http://www.w3.org/1999/XSL/Transform"  
  version="1.0">  
<xsl:output method="html" encoding="utf-8" />
```

```
<xsl:template match = "/" 作品情報 ">  
<html>  
<head>  
<title><xsl:value-of select = " 題名 " /></title>  
<link rel = "stylesheet"  
  type = "text/css"  
  href = "sakuhin.css" />  
</head>
```

```
<body>  
<h1><xsl:value-of select = " 題名 " /></h1>  
<div class = "作家名">  
  <xsl:value-of select = " 作家名 " />  
</div>
```

```
<div class = "技法">  
  <xsl:value-of select = " 技法等 / 技法 " />  
</div>
```

```
<div class = "支持体">  
  <xsl:value-of select = " 技法等 / 支持体 " />  
</div>
```

```
<div class = "形状">  
  <xsl:value-of select = " 技法等 / 形状 " />  
</div>
```

```
<div class = "大きさ">  
  <span class = "数値">
```

```
<xsl:value-of select = " 大きさ / 縦 " />  
</span>  
  <xsl:value-of select = " 大きさ / 横 " />  
</span>  
</div>
```

```
<div class = "作品解説">  
  <xsl:value-of select = " 作品解説 " />  
</div>  
</body>  
</html>  
</xsl:template>  
</xsl:stylesheet>
```

6. サイト内検索の実現

XML形式のテキストを用意しておけば、Googleなどが提供する「サイト内検索」により、全文検索的に作品情報を検索する機能を簡単に実現できる。(具体的には講演時に述べる。)

7. 外部情報検索サービスとの連携

国立国会図書館デジタルアーカイブポータル(PORTA)は図書、論文をはじめ美術作品、文化財、郷土資料など幅広い分野のデジタルアーカイブなどが登録され、それらを横断的に検索できるサービスである。PORTAへの情報提供の方法はOAI-PMHやZ39.50、RSSなど様々な方法で情報検索に必要な索引情報(メタデータ)を提供することで実現される。

作品情報をXML形式で記述しておけば、XSLTで作品情報からメタデータを含んだRSS2.0形式データに自動的に生成し、それを適宜PORTAからアクセスしてもらえば、PORTAから作品情報が検索可能となる。

8. おわりに

美術館にしかできない「作品情報をXML形式で記述し、インターネットからアクセス可能などところにアーカイブする」というポイントをおさえ、他は外部との連携により省力化やコスト削減をはかりながら、情報発信は可能である。このように美術館からの情報発信は外部との連携という方法により、大きく変わっていくであろう。

全国美術館会議 情報・資料研究部会 企画 セミナー レジユメ集
美術情報・資料の活用法 ― 展覧会カタログから Web まで

発行 / 編集 全国美術館会議 情報・資料研究部会
(全国美術館会議 事務局) 〒110-0007
東京都台東区上野公園 7-7 国立西洋美術館内
TEL : 03-3828-0290 FAX : 03-3828-0295
URL : <http://www.zenbi.jp>

発行日 2009年11月10日

印刷 株式会社 プリンテック
